

## 新教育課程における総合的な探究の時間と特別活動及び教科との 連携—国際理解教育の教育内容を事例として—

The Study on the Cooperation between Period for Integrated Research,  
Special Activity, and Subjects in the New Curriculum : A Case Study on  
the Contents of International Understanding Education.

加藤 裕明

KATO Hiroaki

The purpose of this paper is to shed some light on what cooperation between Period for Integrated Research, Special Activity, and Subjects in the new curriculum should be. The study of the practice of International Understanding Education in high school shows the effectiveness of teaching through cross-curriculum learning between Period for Integrated Research, Special Activity, and Subjects. The analysis of the process of that learning showed that students expanded knowledge by promoting both independent and collaborative learning environments for students. In the process of this learning, and through direct experience, such as school trip for Special Activity, students reconstruct and reorganize their experiences. Finally, we demonstrated a class design on how to enable students to acquire practical attitudes toward social issues from a global point of view in the present day.

### はじめに

本稿の目的は、高等学校における「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）に変わり、新たな学習指導要領によって示される「総合的な探究の時間」（以下「総合探究」）を見据え、具体的な国際理解教育の実践例を題材として、総合探究と特別活動及び教科との連携のあり方を検討することである。

新しい学習指導要領は、小学校ではすでに 2018 年度から、中学校で

は2019年度から全面実施、そして高校では2022年度から年次進行で実施される。その柱は「主体的・対話的で深い学び」である。「総合学習」から「総合探究」への名称変更は、2016年12月21日、中教審が「高等学校においては、小・中学校における総合的な学習の時間の取組の成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、位置付けを明確化し直すことが必要と考えられる」と答申したことを受けたものである。

両者のちがいを一言で言えば、総合学習は、所与の「課題を解決することで自己の生き方を考えていく学び」であるのに対し、「総合探究」は、自己のあり方や生き方と密接に関わる課題を「自ら発見」（傍点加藤。以下同じ。）し、解決していくような学びを展開していく点である。

(1) つまり、生徒が自分自身で課題や問いを見つけ、探究し、解決していくことができるようになることが重視される。これは、新学習指導要領において子どもたちに育成すべきとされる資質・能力と結びついている。その資質・能力は、「三つの柱」で構成される。すなわち、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」<sup>(2)</sup>の三点である。新しい「総合探究」においては、この柱を旧来の教科及び特別活動と連携させて展開することが期待されている。

旧来の学習指導要領において総合学習と特別活動では「体験活動」が重視されてきた。この体験活動は総合探究でも重視される。これに関し、総合探究では、「探究の過程に体験活動を適切に位置付けることが重要であり、そうした中で行われる全身を使った対象の把握と情報の収集が欠かせない」のであり、「間接的な体験による二次情報も必要ではあるが、より優先すべきは、実物に触れたり、実際に行ったりするなどの直接体験であることは言うまでもない」<sup>(3)</sup>とされており、体験活動は子

どもたちの身体性と密接な関係にあることを強調している。

ところで、デューイは「経験の意味を増し、その後の経験の進路を導く能力を高めるところの経験の改造、または再組織」<sup>(4)</sup>こそが教育であるとする。つまり、経験（体験活動）そのものではなく、その意味を生徒自身が再構成することが重要であるという。

この「経験の再構成」の過程について、折出は、「所与の慣習の再生産過程にならないような熟慮が必要となる」とし、「子どもたちが環境との相互作用を通して、経験の意味を再認識する過程であると同時に、社会をよりよく改変していく主体の形成過程でもある」とする。<sup>(5)</sup>

また奈須は、総合学習においては、「本来が渾一的である生活をよりどころに教育を構想するとき、そこには教科以外のさまざまな教育内容が入り込んでくるし、各教科も含めたすべての教育内容が渾一的に学ばれていくのである」<sup>(6)</sup>としている。

しかし、経験を再構成する主体にしろ、渾一的である生活の主体にしろ、子どもたちを「主体」と見るときに、具体的にその学びをどのような身体性においてとらえればよいのか、といった議論は十分ではない。そこで、身体性に焦点をあてながら子どもの学習過程を考えることによって、総合探究において、子どもたちの学びをどのようなものととらえることが、「所与の慣習の再生産」を免れ、「経験の意味を再認識する」ことにつながるのか、といった議論が必要だろう。

先行研究の課題を以上のようにふまえ、筆者は、高校における新しい総合探究を展開していく上で、生徒の学びに関する視点に関し、以下の諸点を提示する。

第一、見学旅行という「直接体験」を見据えた事前学習の中で、生徒が仲間とともに主体的に問題関心を持って課題を選ぶこと。第二、「直接体験」において、生徒の問題関心や選んだ課題をもって、現地の人々と交流すること。第三、事後学習として、「直接体験」を踏まえた探究・

発表活動によって、生徒の中の経験の意味を再構成させていくこと。それらの中で、自分とは何者であるかという批評性のまなざしを獲得すること、そしてそれまでの渾一的な生活身体の中に揺れが生じること、その身体性に着目したい。

以上をふまえ、本稿では、総合探究の目標を実現するための課題の一つとして文科省が例示<sup>(7)</sup>する国際理解教育を軸に、総合探究のあり方を、特別活動及び教科との連携によって実現させた実践例として、札幌の公立 A 高校普通科グローバルコース（以下 G コース）の 2 年生 1 クラス 39 名を対象に、筆者らが指導に関わった 2012 年度の実践を取り上げる。

A 高校では、G コースが設置された 2005 年以來、現在に至るまで学校行事（特別活動）としての海外見学旅行（マレーシア・シンガポール）を実施してきた。そこで、2012 年度は、この見学旅行を G コース 2 年生に設けた学校設定科目「国際協力」の学習に接続させる形で実施することとした。<sup>(8)</sup> 「国際協力」の学習目標は、①「人権や異文化への共感的、実感的理解を深める」こと、②「国際協力を具体的な活動として実践できる力を養う」こと、そして③「国際協力に関し、新聞を中心とする資料を収集し、各紙の論調を比較し考察するメディア・リテラシーの力を養う」こと<sup>(9)</sup>、の三点である。本稿では、この実践を「カリキュラム・マネジメント」<sup>(10)</sup>の視点から、総合探究と特別活動及び教科との連携<sup>(11)</sup>による新たな実践構想として提示したい。そして、その中で、生徒が主体的に問題関心を持ち、「直接体験」を経て、経験の意味を再構成させていく過程における身体性に焦点をあてながら、実践を批判的に検討する。

## 1 実践過程

(1) 「マレーシア・シンガポール海外見学旅行」実践（2012 年度）の目

的、ねらい及び方法

学校設定科目として置いた「国際協力」は、既存の教科の学習目標を横断的かつ総合的にまとめあげる役割を担っている。例えば、現行の「高等学校学習指導要領」「第一章総則」では、「国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性ある」<sup>(12)</sup> 生徒を育てることをうたう。また「地理歴史」の「目標」(第一款)においては、「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する」<sup>(13)</sup> 生徒を育てることがうたわれる。そして「現代社会」では「国際社会における貧困や格差について理解させ、国際平和、国際協力や国際協調を推進する上での国際的な組織の役割について認識させるとともに、国際社会における日本の果たすべき役割及び日本人の生き方について考察させる。」<sup>(14)</sup> と記されている。

さらに、新しい学習指導要領が示す地理歴史科に共通する目標は、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することである。<sup>(15)</sup> これは、現行の高等学校学習指導要領公民科の目標に示されている「『平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う』ことの趣旨を一層明確にする」<sup>(16)</sup> ものである。

一方、新学習指導要領で創設される「歴史総合」の内容に関しては、「第二次世界大戦については、この戦争が世界の諸国家・諸民族に未曾有の惨禍をもたらし、人類の文化と生活を破壊したこと、我が国が多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大な損害を与えたこと」に鑑み、「平和で民主的な国際社会の実現に努めることの重要性を自覚させるようにする。」<sup>(17)</sup> と明記されている。

以上のように「国際協力」は、これら新旧の学習指導要領において示される教科の教育内容を横断的に関連させながら、生徒が獲得した知識をつなぎ、グローバル時代のアジア地域に生きる人間として直面する問

題に関わり、行動出来るようなプログラムをデザインする要素を含んでいる。

そこで海外見学旅行に接続させた「国際協力」全体の目標及び方法を以下三点にまとめる。<sup>(18)</sup>

第一、「国際協力」の授業の中に「国際平和」をテーマ学習（事前の調べ学習）として取り入れること。

第二、見学旅行に向け、「プレゼンテーション」（英語科）と「国際協力」（地歴・公民科）及び「英語Ⅱ」との連携を深め、両科目をタイアップさせて授業をすすめること。具体的には、「プレゼンテーション」で組んだ班と同じグループメンバーで「国際協力」の班員を構成する。「プレゼンテーション」では、マレーシアの交流校（ジェンポール中等学校）の生徒やシンガポールの大学生とのディスカッションに向けて、日本の衣食住に関わる伝統文化や、北海道・札幌の地域文化、あるいは現代日本文化を代表する音楽やポップ・カルチャーについて調べさせる。と同時に、見学旅行が、表層的な「交流」に陥ることのないよう、生徒の身体を通した直接体験を重視すること、また、日本と東南アジアの歴史的な接点への視点を持たせるため、第2次世界大戦（アジア・太平洋戦争）における日本とマレーシア、シンガポールの関係を調べ、ポスターセッションを行う。

第三、「アジア・太平洋戦争」に関するシンガポールの博物館学習をコースの中に盛り込み、シンガポール、マレーシアの人々から見た「アジア・太平洋戦争」の歴史認識を学ぶことである。一方的な戦争史観に陥ることなく、双方向の歴史認識を獲得することを目標とする。

因みに、ここで言う「博物館」とは、「旧フォード工場戦争記念館（OLD FORD MUSEUM）」のことである。この記念館は、その名の通り戦前・戦中は英国フォードの自動車工場であった。1942年2月15日イギリス軍は、ここで日本軍に降伏した。戦後、工場は再開されたものの、1980年に操

業を停止し、2006年2月15日、歴史を記録するための戦争記念館として開館した。2012年度の実践では、アジア・太平洋戦争における日本のマレーシア、シンガポールに対する加害の実態を、現地の博物館を訪問することで、生徒に実感させるとともに、調べ学習の深化をはかろうとした。

一般に「太平洋戦争」といえば、1941年12月8日未明の日本のハワイ真珠湾への奇襲攻撃からはじまる日米戦争と理解されている。だが、事實は異なる。日本軍は、ハワイも攻撃したが、その一時間前、すでにマレーシア（当時は英領）のコタバル海岸に上陸した。「太平洋戦争」は、マレーシアからはじまったのである。はじまりだけではない。「太平洋戦争」の戦場の大半はアジアであり、シンガポール、マレーシアを含めアジア各地で一般住民が殺害された。これらの事實は「太平洋戦争」の本質を示すものである。戦場となったアジアの現地に立ち、一国中心主義を克服し、生徒に、より多面的な歴史認識を獲得させることを目指した。

## (2) 海外見学旅行の概要

旅行の概要は表1の通りである。

表 1	海外見学旅行の概要			
日程	2012年10月16日（火）～20日（土）			
旅行先	マレーシア、シンガポール			
参加者	生徒	男性	女性	計
	高校2年生	7名	32名	39名
	引率教員	3名	1名	4名
	備考	担任(加藤)、管理職・グローバルコース長	副担任(井田)	

一見したところわかるように、このクラスは男女比がアンバランスである。グローバルコースは例年男子が少なく女子が多い。2012 年度も例外ではなかった。

(3) 事前・事後の学習の流れ

表 2		教科横断的なカリキュラム編成による事前・事後学習の流れ	
2012年	国際協力 (1 単位)	「プレゼンテーション」(2 単位)	英語Ⅱ (4 単位)
7月		交流校 (マレーシア・SBP Integrasi Jempol) での活動グループとトピックを決定する。 Shu 先生のシンガポールプレゼンを視聴し、シンガポールへの理解を深める。	Singlish (シンガポール英語) の学習
夏休み		Portfolio (ポートフォリオ=交流校生徒に紹介する資料) を作成し、マレーシアの交流校 (Jempol 中等学校) での自己紹介、及び日本文化紹介の準備をすすめる。	
8月	国際平和学習: 「アジア・太平洋戦争」(1931-45) とマレーシア・シンガポールとの関係を、4つの	インタビュー練習: ALT に相手になってもらい、交流校の生徒にインタビューするための練習をする。	
9月	テーマを軸に調べる。4つのテーマとは、①太平洋戦争のはじまりと日本軍のマレーシア・コタ	インタビュー結果をパワーポイントにまとめて英語で発表する。	「プレゼンテーション」の時間だけでは足りな



	<p>バル上陸②日本軍のシンガポール占領③泰面鉄道の建設とアジア太平洋戦争④華僑虐殺と太平洋戦争。</p> <p>以上を班毎に選択させ調べ活動に入る。</p>		<p>い準備作業を適宜行う。</p>
<p>(秋季休業) Skype (インターネットによるテレビ電話) をつなぎ、Call 教室で Jempol 中等学校の生徒、職員と班ごとに挨拶、交流をする。</p>			
10月	<p>上記4つのテーマに関し、調べた内容を模造紙にまとめる(プレゼンポスターの製作)。そのポスターを使って、各班プレゼンを行う。</p>	<p>マレーシア・交流校でディスカッションを行うための準備をする。</p>	
<p>School trip to Malaysia/Singapore 10 / 16~20</p>			
11月	<p>見学旅行中の課題(自分の調べた内容に関する場所を一カ所、写真に収め、解説する)をまとめる。</p>	<p>ディスカッションのまとめを行う。</p> <p>パワーポイントを準備し、リハーサルをする。</p>	
12月		<p>グループ別に発表会 12月には3年生の卒業論文発表会に合わせ、各グループの代表が見学旅行の報告を行う。</p>	

表2 に示したように、2012 年度の実践は、「国際協力」と「プレゼンテーション」そして「英語Ⅱ」を連携させ、海外見学旅行という「体験活動」を軸に、事前・事後の学習活動を組織した。

実際の授業展開の中では、教師から生徒に一方向的に教えるというスタイルはとらず、可能な限り、生徒たち自身がクラス及び班のメンバーとともに協働的に調べ、発表（写真1）する活動が行われるようデザインした。

先にも触れたように「国際協力」も「プレゼンテーション」も学校設定科目であるが、慣例的に前者は地歴・公民科の教員（2012 年度は担任の加藤）が、後者は英語科の教員（2012 年度は副担任の井田他、英語科教員2名と ALT3名）が中心となり担当してきた。「国際協力」「プレゼンテーション」それぞれの授業において、生徒は班ごとにテーマを選択し、調べ学習を行った。生徒が選択したマレーシア、シンガポールに関するテーマは表3の通りである。

表 3	事前学習による課題選択	
班	授業「プレゼンテーション」のなかで事前に生徒が調べたテーマ	授業「国際協力」のなかで事前に生徒が調べたテーマ
1	Transportation (交通)	太平洋戦争のはじまりと日本軍のマレー半島・コタバル上陸
2	Festival (祭り)	太平洋戦争のはじまりと日本軍のマレー半島・コタバル上陸
3	Sightseeing Spots (観光)	日本軍のシンガポール占領
4	Music (音楽)	日本軍のシンガポール占領
5	Housing (住居)	泰面鉄道の建設と太平洋戦争

6	Housing (住居)	華僑虐殺と太平洋戦争
7	Food (食文化)	泰緬鉄道の建設と太平洋戦争
8	Fashion (ファッション)	華僑虐殺と太平洋戦争

事前学習において、生徒は、選択したテーマにしたがって、図書館の書籍やインターネットを利用して調べ学習を行った。調べ学習をすすめるなかで、身体を通した直接体験を重視する観点から、マレーシアのジェンポール中等学校や、シンガポールでの地元大学生との交流、そしてディスカッションのための質問作成を準備した。特に国際平和学習として、アジア・太平洋戦争における日本とマレーシア、シンガポールの関係を調べた。調べた内容を模造紙にまとめ、見学旅行に出発する直前の10月5日にポスターセッションを行った。(写真1、2) また、「プレゼンテーショ

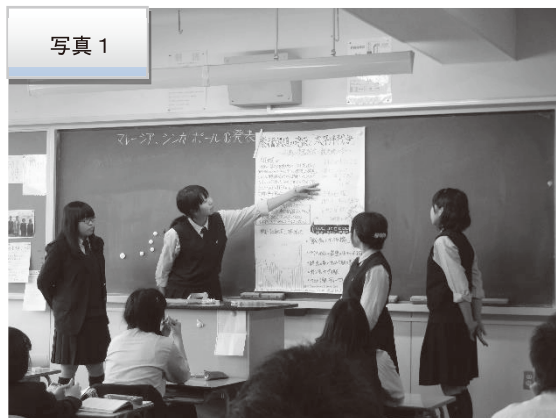


写真1

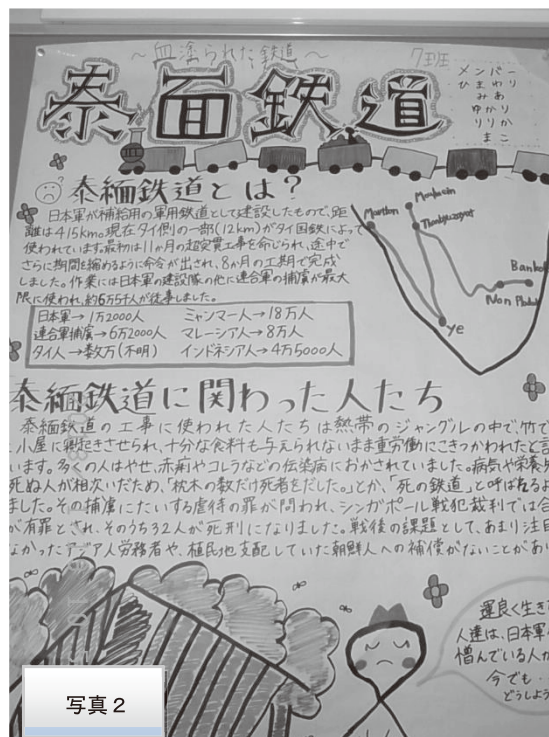


写真2

ン」で調べたテーマについては、後述するとおり帰国後、12月14日に報告会を行った。

## 2 記述式アンケート結果

旅行から帰着後、この体験活動（直接体験）に関して、生徒にアンケートをとった。質問項目は、以下の通りである。

**質問①** 今回の見学旅行を通して、「国際人権」「国際協力」「国際平和」「異文化理解」の観点から、印象に残った点を記しなさい。

**質問②** 見学旅行の中で、英語を用いたコミュニケーション力は、どの程度発揮できましたか（あるいは出来ませんでしたか）。その理由と、そこで考えたことを述べなさい。

**質問①**に対して、生徒は以下のような記述を残した。抜粋して紹介する。なお、生徒の言葉のニュアンスを加藤が補った場合には〔 〕内に示した。また、国際理解教育に関わるねらい及び身体を通した直接体験に関係する部分には下線を引いた。

・今回の見学旅行で自分にとって「異文化理解」という点で、一番重要な体験になった。人と人との関わりの中で宗教がそこまで重要というか、気にしなければならぬ存在だとは思わなかった。〔しかし〕マレーシアの学校の生徒たちも、私たちと同じ雰囲気話し、笑い、違いを感じることはなかった。イスラム教ならではの“右手で食事”を自分もやってみたが、とてもおいしかった。その土地の食べ物をその土地の文化に沿って食べるのが、一番おいしい食べ方だということを感じた。(H.A)

・1日目のホテルの部屋の天井に緑色で（多分）アラビア語の書いてある矢印を見つけた。しばらく何か分からなかったけどメッカの方向だろうと考えた。多宗教の国家ではそのような事も配慮したホテルが存在するんだな、ととても印象

に残った。仏教、ヒンドゥー教、イスラム教の3宗教で構成されているマレーシアらしいホテルだと思った。(M.M)

・宗教の違いに驚いた。日本は無宗教だから日常の中で宗教による縛りや決まりもなく割と自由に暮らしている。マレーシアやシンガポールは多民族国家ということで色々な宗教が混ざり合いながら暮らしている不思議な国だと思った。その中でも特に印象深かったのは、トイレにシャワーがついていること。ごはんを右手だけで食べること。左手が不浄の手だという宗教の決まりだけで、こんなに生活しにくいこともあるんだなと思った。(A.S)

・歴史博物館(OLD FORD MUSEAM)は衝撃的だった。ここを訪れるまでは授業やTVでしか日本軍のやったことを、日本側からしか学んだことがなかった。最初の映像、英語は殆ど聞き取れなかったけど、映像だけでも過酷なものだった。そのあとのギャラリーでも実際に使われていた武器や生々しい写真新聞の記事などで日本人が如何に酷いことをしてきたのか知った。見たり聞いたりするのは辛いものもあるけれど日本人として知っておくべきだと思う。(T.R)

・一番印象に残っているのは、歴史館(OLD FORD MUSEAM)で見たビデオ。その中のシーンで、日本軍兵士が笑いながら華僑(?)の人の首を持っているシーン。本当に残酷だと思った。大学生のガイドさんのシュウさんにシンガポールの人はいまだうらんでいるのかと聞いた所、若い人はそーでもないが年配の方はそうゆう<sup>[ママ]</sup>人もいと聞いた。日本人は戦争の悲惨さをもっと深く知り、後世に伝えるべきだと思った。(S.K)

・生活様式や建物、言語も全く異なる国に行くことにより日本の良さや足りないところを改めて知ることができました。歴史記念博物館に行き、日本で調べたこと以外のことを知ることもでき、その国側からの視点で物事をとらえることができました。このような日本と違う所を知り、違う視点で見ることができたことが、今回の修学旅行でとても印象に<sup>[ママ]</sup>なりました。(S.E)

・国際平和については、OLD FORD MUSEAM に行ったときに、平和で争いがないことほど幸せなことはないなと思いました。平和とは決して言えなかったあの

時代のことも忘れずにいなければならないと感じました。(Y.H)

次に、質問②に対する回答内容を紹介する。下線部は同様に筆者による。

・学校訪問の時、しっかりと英語で会話ができた気がします。自分から疑問に思っていたことや、相手がどんな趣味を持っているかなど聞くこともできました。とてもじゃないほど<sup>「ママ」</sup>不安でしたが、ゆっくりとではありますが、力がついてきているかな、と思いました。同年代だから、ということもあったかもしれませんが、でも入学当初の自分なら、誰か他の人を頼れば大丈夫、だから自分は見てるだけ、みたいな感じだったと思います。だから少しずつ上達している実感を感じれ<sup>「ママ」</sup>たので、もっと上達できるようになりたいです。(M.K)

・マレーシアの人は、マレー語のようなものがまじっていたり、早口だったりして、しゃべるのが難しかった。でもがんばれば、通じることができるということを今回は学びました。シンガポールの人は比較的ききとりやすかった。大学生はごく普通の英語をしゃべっていた。なまりがある英語を理解するには、まず普通の英語でもっと深くコミュニケーションをとれるようにして、それから、いろんな国に行ってなまりになれるしかないのではないかと思います。とにかくこれから大人になるまでにたくさん英語をしゃべりたいです。(K.M)

・マレーシアの学校に行ったときは、自分なりににはコミュニケーションはできたが、ディスカッション以外で、内容のちゃんとした会話はあまりできなかつ



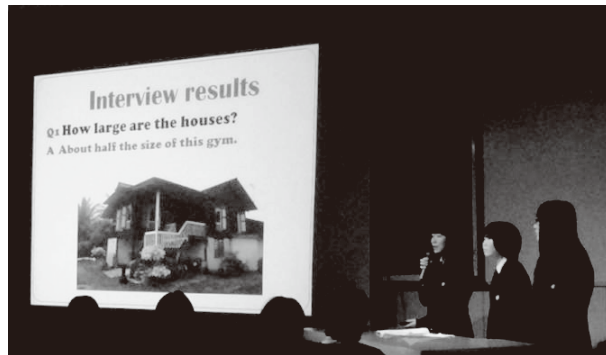
マレーシア・ジェンポール中等学校でのグループディスカッションの様子 (2012/10/18)

たです。それはまず相手の言っていることを完璧に理解できていなく、自分が言いたいことのボキャブラリーがすぐにでてこないことが理由だと思います。大学生の方とはなるべく英語で会話するようにしたので、けっこうよかったと思います。大学生の方はとても英語が聞き取りやすかったのが理由だと思います。

(T. I)

・マレーシアの英語はすごくききとりやすく、理解するのが大変だった。必ずききかえして、分かるまで別の言い方で言ってもらったりした。お土産をかうときも結構ききとるのは大変だった。人と話して慣れるしかないなと思った。シンガポールの大学生はマレーシアより聞き取りやすく話せた。〔前もって調べておいたシンガポールの〕ト

ピックについてきいて、お互いに会話を楽しめた。日本語がすごい上手だった。〔会話の中で〕わからないことがあれば聞き直し



とわかるまでなげ出さない。も 海外見学旅行報告会の様子 (2012/12/14)

っと人と英語でコミュニケーションをとって耳を慣らさせる。(Y. M)

・普段耳にしている英語は、先生の英語や、ALTのきれいな(?)訛りとかみたいなものがあまりない英語だから、マレーシアに行って、ディスカッションの時にうわ、すごいと思った。すごく聞き取りづらくて最初は少し苦戦したけど、慣れてくるとだんだん聞き取れて嬉しかった。コミュニケーション能力についてはまだまだだなと思う。訛りなんか気にならなくなるくらい力を上げたい。(H. R)

・自分のコミュニケーション力は、十二分に発揮できたと思う。私たちのグループの子たち(マレーシアの学校訪問)は、比較的、わかりやすい英語を話す子たちだったので、ディスカッションも楽しく、くわしくできた。シンガポールでの自主研修のときは、シンガポール大学の学生スカイさんが、ガイドさんだったが、



彼女は、日本語も話すことができる人だったけど、なるべく英語で話した。とても良い時間を過ごした。両国で中国語で話しかけられることが多かったが、それにはおどろいた。(H.A)

### 3 事後報告会での発表

12月14日(金)、3校時から6校時を使い、A高校1階講堂において、マレーシア・シンガポール海外見学旅行帰朝報告会を行った。この報告会は、Gコース3年生の卒論発表会との抱き合わせで行ったものである。異年齢の生徒たちが互いに発表者になり、また聴衆にもなる形で、対話的に進められることが特徴である。発表会当日は、1,2,3年生Gコースの生徒約120名に加え、英語の授業をふりかえて参加した普通コースの生徒40名、教員、保護者、卒業生そして外部の教育、学校関係者、他校生徒等で来客席はほぼ満席の状態だった。全8班のうち、発表(プレゼンテーション)できるのは時間の都合上4班のみであり、それらは、教員によって選抜された。

見学旅行報告会は活気をもって進んだ。司会者をつとめた生徒が「プレゼンテーション」と「国際協力」の中で取り組んできた「異文化理解」、「国際平和学習」の概要を説明した。そして、マレーシア、シンガポールの現地での様子を別の2名の女子生徒が英語で説明した。その後、選ばれた4つの班が、それぞれのテーマについて発表した。質疑応答もすべて英語である。3年生からも多くの質問を受けることが出来た。逆に3年生の卒論発表に対しては質問する側に回り、異年齢交流の中でプレゼンテーションの内容と方法に関し、聞く側を惹きつける要素を吸収し、自分たちに足りないものを率直に反省する機会となった。以下、報告会を終えて2年生生徒が記した感想を抜粋して示す。

- ・3年生の先輩3人のプレゼンはとても惹きつけられた。N先輩のファーストフードの問題については日本でも例外じゃない部分があるし、K先輩の知り合いの



元少年兵だった人の話がでてきて、具体的でわかりやすい内容だった。M先輩の育児問題も、母親だけでなく、父親やその周りの人のサポートも重要だと考えることができた。難しい質問にもすぐにちゃんと自分の意見を返すことができる先輩達や、クラスメイトはとてもかっこよかった。(T.R)

・T先輩のプレゼンでは発表が始まった瞬間、一瞬でその世界に引き込まれて自然と聞き入ってしまいました。人を引きつける発表の仕方でした。参考にしたいと思いました。(K.M)

・発音も、発表内容も、質疑応答もすごく参考になった。Individual Researchに活かしたい。今、Outlineを書くのにごちゃごちゃになってわからなくなっていたけど、結局は何を伝えたいかなんだと思った。(K.N)

・今回プレゼンできたのはいい経験になりました。最後に先生が言った「3年間で今日みたいなすごいプレゼンができるようになる」っていうのは本当にそうだなと思いました。3年生のプレゼンは表面的なことだけではなく、深いところまでいってとても参考になりました！(S.A)

#### 4 むすび：課題と考察

以上、新学習指導要領による「総合的な探究の時間」と特別活動及び教科を連携させ、国際理解教育を軸として行った実践例を紹介してきた。

以下、本実践を批判的に検討し、総合探究と特別活動及び教科との連携と展開のあり方について、カリキュラム・マネジメントの観点から提示したい。

Gコース2年生に設けられた学校設定科目「国際協力」の学習目標は、①「人権や異文化への共感的、実感的理解を深める」こと、②「国際協力を具体的な活動として実践できる力を養う」こと、そして③「国際協力に関し、新聞を中心とする資料を収集し、各紙の論調を比較し考察するメディア・リテラシーの力を養う」こと、という三点であった。これらを、新学習指導要領の「三本の柱」すなわち①「何を理解しているか、

何ができるか」、②「理解していること・できることをどう使うか」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の三点と切り結ぶようにして授業デザインをすすめる必要がある。とりわけ、知識を知識として知っているだけではなく、それをどう使うか、使って何ができるようになるか、そしてどのように世界と関わり自己の人生をよりよくしていくのか、といった「経験の再構成」に関わる学びが、生徒の学習過程の中に組み込まなければならない。

本実践では、見学旅行に旅立つ前の「プレゼンテーション」の授業で、マレーシア、シンガポールの現代文化を調べ、現地の生徒・学生とのグループディスカッションに役立てるべく活動した。また、「国際協力」の授業では、アジア太平洋戦争時の東南アジアと日本との関係に焦点をあてポスターセッションを行った。生徒の感想文（下線部）からも読み取れるように、それら事前学習をふまえ、現地の生徒・学生とディスカッションし、博物館で資料や映像等に触れることで、身体を通した直接体験を得た。例えば、生徒 S.K（12 頁）の、「大学生のガイドさんのシュウさんにシンガポールの人はいまだうらんでいるのかと聞いた所、若い人はそーでもないが年配の方はそうゆう人もいると聞いた。日本人は戦争の悲惨さをもっと深く知り、後世に伝えるべきだと思った。」という言葉からは、自分自身が日本人であること、歴史上の事件にももちろん直接関与したわけではないが、しかし、関係ないとまでは言えない<sup>(19)</sup>、といった揺らぐまなざしとでもいうべき身体性を、くみ取ることが出来るよう。

本稿で検討した実践では、「国際協力」と「プレゼンテーション」という学校設定科目を連携させた事前学習を行った。これをふまえ新しい学習指導要領のもとで、国際理解教育を総合探究として実践する際には、カリキュラム・マネジメントの観点から次のような科目横断的な連携が構想されよう。例えば、「英語コミュニケーション I」（3 単位必修）

あるいは「論理・表現Ⅰ」（2単位選択）の中で、東南アジアに関する異文化理解をテーマにした学習を行い、「歴史総合」（2単位必修）の中で、第二次世界大戦における東南アジアと日本の歴史に関する学習を行う。そして、総合探究においてそれらをポスターセッション用にまとめ、発表する活動を行う。発表テーマは、生徒が仲間とともに主体的、協働的に選択し決定する。そのためのグループ（班）編制は、ホームルームの時間を使って行う。このようなカリキュラム・マネジメントによる教科と特別活動の連携によって新しい総合探究をデザインすることができるだろう。

さらに事後学習として総合探究の時間を使い、現地での直接体験をまとめ、異文化を理解することの喜びと困難、未来への自己の関わり方といった課題を、直接体験にもとづく生徒自身の言葉で発表する。発表会は、自校の生徒のみならず、保護者や近隣の中学生をも招き、地域に開かれた場とする。

以上の構想を図式化するならば、事前学習Ⅰ（科目横断的編成による学び）→事前学習Ⅱ（ホームルームによるグループ編成、総合探究による調べ学習、ポスターセッション）→体験活動（特別活動としての見学旅行）→事後活動Ⅰ（総合探究による体験の言語化、経験の意味の編み直し）→事後活動Ⅱ（総合探究による発表、表現）といった学習の連携を構想することが可能となる。

以上、総合探究、特別活動、教科等を横断的に編み込んだ一連の学習の中で、生徒が主体的・協働的に知識を獲得する過程を示してきた。この過程において、生徒はまた直接体験の意味を再編成する。そのことによって、グローバル時代に生きる実践的な姿勢を獲得する。本稿ではその授業デザインを提示した。

一方で、本実践を検討してきた中で見えてきた課題を以下三点示す。

第一、総合探究は、生徒が自ら課題を発見することに意義がある。今

回検討した実践では、国際協力に関するテーマについては教師が設定した四点の中から選ばせた。この点、生徒が真に主体的に探究し、仲間と協働して発見した課題というにはいささか無理がある。特に、第二次世界大戦における日本とマレーシア、シンガポールとの関係史を重視するあまり、生徒自身がいただく問題意識やレリバンス（関連性）という点ではいささか距離があり、事前のポスターセッションに今ひとつ迫りに欠ける点が見られた。

第二、第一とも関係するが、現地に入ってから、自分たちの選択したテーマに関わって、マレーシアの高校生やシンガポールの大学生と議論を深めた、という記述が、事後の感想にあまり記されていない。特にアジア・太平洋戦争の加害の歴史を現地で知れば知るほど、自分が日本人であることから来るある種のうしろめたさや、戦争に対する向き合い方において、立ち位置をはかりかねる揺らぎといった身体性が生ずるはずである。だがそのようなテキストデータが断片的にしか収集できなかった。帰着後のアンケートのみならず、現地でのディスカッションを終えてすぐの振り返り活動などを取り入れ、生徒の声を可能な限り綿密にすくいあげることが必要であった。

第三、総合探究と特別活動という隣接する教育活動において、その異同をふまえた展開をより明確に行うことが課題である。特別活動には「互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」<sup>(20)</sup> という学習目標がある。これに照らせば、ホームルームの中での人間関係づくり、集団作りについて検証することが本実践ではできなかった。

以上の課題を念頭に、今後も、国際協力を軸とした総合探究と特別活動及び教科との連携を構想し、より実効性あるカリキュラム・マネジメントに取り組んでいきたい。

---

## 【注】

- (1) 文部科学省 (2018)『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』(以下『総合探究編』) p. 8.
- (2) 中央教育審議会 (2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』 pp. 28-31.
- (3) 文部科学省 (2018) 前掲『総合探究編』, pp. 121-122.
- (4) J. デューイ (金丸弘幸訳, 1984)『民主主義と教育』玉川大学出版部, pp. 126-127.
- (5) 折出健二編 (2008)『教師教育テキストシリーズ 12 特別活動』学文社, pp. 119-120.
- (6) 奈須正裕『『総合的な学習の時間』が意図していたもの—学校カリキュラムがもつべきバランスと調和』(鬼沢真之、佐藤隆編著(2006)『未来への学力と日本の教育 6 学力を変える総合学習』, 明石書店, pp. 288-294.)
- (7) 総合探究の目標を実現するにふさわしい課題として文科省が例示するのは、地域や学校の実態、生徒の特性等に応じた「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題」である。文部科学省 (2018) 前掲『総合探究編』, p. 88.
- (8) 「国際協力」は、1 年次の学校設定科目「国際的人権」をふまえた科目であり、また 3 年次の学校設定科目である「ワールドスタディーズ」につながる科目である。「国際的人権」は、「紛争」「貧困」「子ども」「マイノリティー」等をキーワードとして、社会的弱者の人権を尊重する立場から国際的視野を獲得していくことが目標である。この学習をふまえ、2 年次の国際協力につながる構想を持つ。3 年次の「ワールドスタディーズ」は、12 月の日本語卒業論文提出を視野に、1, 2 年次で獲得した国際的人権の視点と国際協力の実践過程をふまえ、自ら課題を発見し、グローバリズムに対して批判的な視点を持って課題解決への糸口を探究していくことを目標とする。
- (9) 札幌清田高校 (2012)『平成 24 年度 年間授業計画表』
- (10) 新しい学習指導要領では、教科等の内容について、横断的に相互に関連付けを行ったり、必要な教育内容を組織的に配列し直したり、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させること、そして人材や予算、時間、情報、教育内容といった必要な資源を再配分することが求められている。これを「カリキュラム・マネジメント」と呼ぶ。中央教育審議会 (2016) 前掲, p

---

p. 24-25.

- (11) 新学習指導要領では、総合探究と特別活動のちがいについて、「両者の目標を比べると、特別活動は『実践』に、総合的な探究の時間は『探究』に本質があると言える。特別活動における『実践』は、話し合っ  
て決めたことを『実践』したり、学んだことを学校という一つの社会の中  
で、あるいは家庭を含めた日常の生活の中で、現実の課題の解決に生かし  
たりするものである。総合的な探究の時間における『探究』は、物事の本  
質を探って見極めようとしていくことである。」(文部科学省(2018)『高  
等学校学習指導要領解説 特別活動編』, pp. 32-33.) と述べた上で、「実  
践」と「探究」の連携を重視している。
- (12) 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領』, 第一款「教育課程編成の一  
般方針」. p. 1.
- (13) 文部科学省(2009)前掲, p. 24.
- (14) 文部科学省(2009)前掲, p. 32.
- (15) 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 p. 31.
- (16) 文部科学省(2018)前掲『地理歴史編』 p. 33.
- (17) 文部科学省(2018)前掲『地理歴史編』 pp. 164-165.
- (18) マレーシア、シンガポール海外見学旅行の詳細な行程については、加藤  
裕明(2013)「異文化理解及び国際平和学習を目的とした海外見学旅行実践  
報告—札幌A高校第37期グローバルコース見学旅行 マレーシア、シン  
ガポール」(『清田高校紀要』第38号)を参照いただきたい。
- (19) この生徒の言葉の解釈に関しては、例えばテッサ・モーリス・スズキの  
論考を参考にした。スズキは、戦後世代に第二次世界大戦における加害の  
直接的な責任はないが、「事後の共犯」的關係はあるとする。「戦後生まれ  
の戦争責任は～豪の歴史学者、テッサ・モーリス・スズキさんに聞く」(『朝  
日新聞』2015年12月25日)。
- (20) 文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領』第5章特別活動, 第1 目  
標。

【参考文献】（アルファベット順）

- ・中央教育審議会答申（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- ・ J. デューイ（金丸弘幸訳, 1984）『民主主義と教育』玉川大学出版部
- ・加藤裕明（2013）「異文化理解及び国際平和学習を目的とした海外見学旅行実践報告—札幌A高校第37期グローバルコース見学旅行 マレーシア、シンガポール」（『清田高校紀要』第38号）
- ・文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』
- ・—————（2018）『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』
- ・—————（2018）『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』
- ・折出健二編（2008）『教師教育テキストシリーズ12 特別活動』学文社
- ・鬼沢真之、佐藤隆編著（2006）『未来への学力と日本の教育 学力を変える総合学習』明石書店
- ・札幌清田高校（2012）『平成24年度 年間授業計画表』
- ・テッサ・モーリス・スズキ（2015）「戦後生まれの戦争責任は～豪の歴史学者、テッサ・モーリス・スズキさんに聞く」（『朝日新聞』2015年12月25日）

（かとう ひろあき 札幌大谷大学非常勤講師）